

いきなりクレイジー・ラブ

### プロローグ

朝の通勤ラッシュで混み合う電車。私のすぐ近くに立つ一人の女性が、一瞬視線をさまよわせる。それから彼女はなにかを堪えるようにぐっと目を閉じて俯いた。

顔は青ざめて見えるが、頬だけはほんのりと紅潮している。

そんな彼女を含めた大勢の人々が、電車の規則正しい揺れに合わせて身体を上下に揺らしていた。やがてカーブがやってきて、電車が一段と大きく揺れる。体勢を崩した彼女は、わずかに目を開けてすぐそばにある手すりにしがみつくように身体を寄せた。すると、うしろに立つスーツ姿の男も移動し、彼女にピッタリと密着する。

——私は最初、男もよろけて立ち位置を変えたのだと思った。でも、やっぱり気のせいではない。男の左手は、彼女の臀部に向かって不自然に伸びている。

男の微かな動きに合わせて、彼女の身体が小さく跳ねる。耳元に男の吐息がかかり、目が大きく見開かれた。

私は咄嗟にスマホを握り締め、動画を取り始める。

そして男が、ゆっくりとその手をスカートの中へと潜り込ませたところまで——

「はい、そこまで」

私は乗客を掻き分けて彼女たちの横へ行き、不埒な手を掴む。次の瞬間、下品な笑みを浮かべていた男の表情が変わった。

「朝から痴漢とは、男の風上にも置けないヤツ。恥を知りなさい」

しっかりと握った男の首を捻り、できるだけ高く持ち上げる。

百七十センチの身長に剣道でならした腕を持つ私は、大して鍛えてなさそうな男を捕まえるなんてわけない。

「え……、痴漢？」

騒ぎに気づいた周囲が徐々に騒がしくなってきた。先ほどまでこの男に痴漢行為を受けていた女性には、涙目になりながらもホッとした表情で事の成り行きを見守っている。

彼女の様子を横目で確認していると、こちらを睨み上げる男が、苦し紛れに大声で叫んだ。

「この……離せ！ 濡れ衣だ、俺はなにもやってない！」

この期に及んでまだシラを切ろうとするとは。男の首を掴む手とは反対の手で握っていたスマホを、某時代劇の印籠よろしく突きつける。

「見苦しい言い訳は止めなさい。あなたの愚行はしっかりと動画に収めさせてもらいました。大人しく、観念なさい」

男の顔から一気に血の気が引き、その場に力なくへたり込んだ。

ちょうどその時、電車が次の駅に着いたので、男の手を引っぱり、被害女性を伴って降りた。

そして二人で男を駅員のところへ連行し、身柄を引き渡したり必要な手続きを行ったりした。

「さて、と。これでひと通りのことは終えたわね」

振り向いて、女性に声をかける。

精神的ダメージは計り知れない。彼女の心情を慮って声をかけたところ、背筋を伸ばし、しゃんとしていた。もう少し付き添っていたほうがいいかと思ったが、これならば大丈夫そうだ。

「あの、ありがとうございます！」

そう言って腰を直角に折った彼女の頭を、ねぎらうようにそつと撫でる。

「怖かったですよう？」

ふたたび彼女が顔を上げたとき——その瞳にうつすらとハートマークが浮かんでいるように見えたのは、気のせいだと思いたい。

「あの、お名前をお伺いしても……？」

「ああ。私は、本郷といいます」

自らの名を名乗り、スーツの胸ポケットに入れていたカードケースから名刺を一枚取り出して渡した。

「本郷、真純さん。匠コンストラクションの主任さん……すごいですね」

どこか恍惚とした表情で、彼女は受け取った名刺を見つめている。

「主任と言っても大勢いるうちの一人ですよ。それじゃあ、私はお先に」

お礼は無用だと言い、次の電車に乗り込むために彼女に別れを告げた。

私たちの距離が十分に離れた頃、彼女が大声で叫んだ。

「あの……お姉様って呼んで、いいですか!？」

——私の背中に流れる長い髪が大きく揺れるほどにガックリと肩を落としてしまったのは、言うまでもない。

## 第一話 サムライ、王子に出会う

「——といった具合で、遅刻しました。申し訳ありません」

会社に着いた私は、今朝の出来事について一通りの説明を終え、課長に深く頭を下げた。

ちなみに、去り際に言われたお姉様うんぬんについては話していない。

「うん……まあ、先ほど警察からも同様の連絡は受けたよ。感謝状は断ったんだって?」

「はい。そんなことのために助けたわけではありませんし。それより遅刻をしまして、本当に申し訳ありませんでした」

いくら痴漢から女性を助けていたとはいえ、遅刻は遅刻。規律を重んじる体育会系としては、時間間に合わなかったことが引つかかる。

「いや、まあ……、君のしたことは正しいよ。でも、くれぐれも気をつけなさい」

「以後気をつけます」

もう一度課長に頭を下げてから、ようやく自分のデスクについた。

「真純さん、大丈夫でしたか!？」

それと同時に、後輩の女子たちに取り囲まれる。

「課長からなにか言われたりしませんでしたか?」

心配してくれていたことが伝わってきて、心遣いについて口元が緩む。

「ええ。口頭注意だけでお咎めはなかったわ」

「お咎めなんてあるわけじゃないですよ! 女性を痴漢から助けたんでしょ? お手柄ですよ!」

女の子たちは痴漢撃退の話題に色めき立つ。

「でも、遅刻したのは事実だもの」

「満員電車で毅然と声を上げるなんて……私だったら見て見ぬふりをしちゃうかも」

見て見ぬふりは、考えなかったな……

痴漢に遭っていた彼女を見捨てることは、父親の教えにも反する。

私の父は警察官だったが、子供の頃に他界している。

追跡中の犯人との銃撃戦の末の殉職——というわけではなく、病気であっけなくこの世を去った。その父が常々『困っている人がいたら助けてあげなさい』と言っていたので、その教えを守るようにしている。

「困っている女性をほっとけないところが真純さんらしいですよ。さすが、我が社の誇る二大王子様の一人です!」

キャリアと盛り上がっているけれど……私は「王子様」なんかではない。

本郷真純、二十九歳。大学の建築学科を卒業後、中堅建設会社の匠コンストラクションに入社し、以降八年間、設計部の製図担当の部署にて勤務している。女らしさに欠けるふるまいはあるかもしれないけど、れっきとした「女性」なのだ。

「仕事ができるし、正義感があつて面倒見もいい。こんなに男らしくてかつこいい人、なかなかいませんよ。さすがはサムライ王子と呼ばれるだけではありませんね！」

「……いや、私、女だから」

断つておくが、外見で男と間違えられたことは一度もない。『見た目だけでも女の子らしくいて』という母の願いから長く伸ばした髪は、耳のうしろの低い位置で結んでいる。この髪型は父の影響もあつて剣道をしていたときの名残だ。防具を被るには、この髪型が一番適している。

父が他界したとき、私の弟と妹はまだ小さかった。それまで公務員の妻としてのんびり暮らしていた母は、女手ひとつで三人の子供を養つていくために働きに出ることを余儀なくされたのである。私も学生生活の傍らでそんな母を支えることになった。

『真純は強い子だから——母さんと、弟たちを頼んだぞ』

それが、父から私への最期の言葉でもあつた。

やんちゃ盛りの小さい弟と妹相手に、可愛くて優しいお姉ちゃんなどはやっていられない。父亡きあとは仕事で留守がちな母に代わつて、私が彼らの世話を焼いた。

『真純ちゃんはいっしょに偉いわ』

『真純ちゃんは強いから、一人でも大丈夫だね』

男勝りで正義感が強くて面倒見がいい。おまけに剣道の心得もあり頼りになる。近所の人たちからそう言われてきた私は、職場でも似たような目で見られている。そんな期待に応えたくて己を律し続けていたら、いつしかポーカークフェイスが標準仕様になつてしまった。

そんな私のことを女子社員たちは——「サムライ王子」と呼ぶようになった。

「男とか女とか関係ないです！ 真純さんを毎日傍で見ているお陰で私たちの男性を見る目は厳しくなつてしまつて。ああ、婚期が遅れたらどうしよう？」

彼女たちの何気ない言葉に、わずかながらも笑顔が引きつる。

婚期の遅れを真に気にするべきは、私のほうなのよ——!?

男性社員に交じつて仕事に没頭してきた私。そのせいか、周囲の皆は私を男性に興味のない人間だと思ひ込んでいる。

男社会という建設業界のイメージのせいか、うちの会社では男性社員に比べて女性社員の比率が圧倒的に低い。それは、女性にとって出会いのチャンスが多い職場とも言える。同期たちは、年を重ねるごとに次々と姿を消していった。社内恋愛を成就させた者もいれば、取引先の人と運命の出会いを果たした者もいる。気がつけば、現役で独身を貫いているのは私だけ。しかも、主任という役職をもらい、ますます仕事に没頭した結果、恋愛からは遠ざかるばかり。

——こういうのを、世間では「お局様」と呼ぶのだろう。

「でも、真純さん以上に素敵な男性なんてそうそういないものね。真純さんは十分に自立した女性

だから一人でも大丈夫だし、私たちみたいに焦らなくていいですよね？」

「そ、そうね……」

——そんなの、ちっともいいわけがない！

本当は私、寿退社がしたいのよ……！

私だって、結婚して出産して母になって、幸せな家庭を築きたい。それに、今まで何人の友人や同僚にご祝儀を渡してきたと思ってる!? 出だけ出して回収できないなんて、そんなもつたいないことがあるか！

父がいないことで、我が家は決して裕福ではなかった。粗末な食事や衣服で毎日を過ごしたというわけではないけれど、娯楽や贅沢なんかはできなかった。休日は弟たちを相手に戦いごっこやおままごとに興じるのも悪くはなかったが、それでも家族旅行に出かける友人たちを、いつも羨ましく思っていた。

だから、いつかは私も家庭を持って、夫や子供たちとの時間を大切に過ごしたい。最低でも子供二人。できれば男の子と女の子を一人ずつ。庭付きの一軒家で犬を飼い、休日には散歩がてら家族揃って公園にピクニックに行つてバドミントンやサッカーを楽しみ、市が運営するようなファミリースポーツ大会にも出たりする、健全かつアクティブなスポーツ一家を目指したい。

——でもそれ以前に、まずは素敵な男性と、素敵な恋愛をしてみたいの！

それというの、二十九歳という年齢は、イコール彼氏がない歴でもある。

ちなみに私の理想は、警察官として剣道の他に柔道も嗜んでいた父のような、筋骨隆々とした、

いわゆるガチマッチョと呼ばれるタイプ。筋肉は常にまとつていられる最高の鍛えだ。鍛え上げられた肉体は男性らしさを象徴し、守ってもらえる安心感がある。それに、己の身体とストイック向き合った証でもあり、精神力の強さだつて証明している。

これまでの人生で、そういう相手に出会う機会がなかったわけではない。だけど、なんとつて声をかければよいのかわからず、連絡先さえ交換できなかった。

口下手なことに加え、ずっと恋愛を二の次にしてきたつけが回つてきている。学生時代は学業と剣道と弟たちの世話とアルバイトに明け暮れ、就職してからは仕事に没頭し、この年になるまで恋愛を疎かにしてきた。なんとも思っていない相手には平然と振る舞えるのに、好みの男性の前だと緊張から固まつてしまう。それがまた余計に可愛げのない姿に見えるのだと、自覚はしていた。

でも、どうすることもできない。それに私は男性の庇護欲をそそのか弱い女性なんかじゃない。可愛い後輩を守るためなら男性社員にも立ち向かい、痴漢だつて撃退する。だから、大抵の男は私の強さを目の当たりにすると蜘蛛の子を散らすように去つて行く。

その結果、もうすぐ二十代の終わりを告げる誕生日が近づいているというのに、私はいまだに恋愛経験ゼロなのである。

いくら晩婚化が進んでいるとはいえ、経験値なしの三十路となれば、結婚できる確率はぐんと減らさるだろう。そんな状況でこれから相手を探さなければいけない現実には、焦っていた。

——だつて、このままでは私、未婚女性界のラスト・サムライになつてしまふ……！

そんなことを内心叫びながら俯いた私の傍に、一つの人影が近づいてきた。

「えー？ 一人でも大丈夫だなんて、そんなのあるわけないでしょう？」  
甲高い声に交じって響く、男性の声。

ふと顔を上げると、スーツ姿の男が立っていた。

年齢に似つかわしくない高そうな細身のスーツに、やや派手目なネクタイ。だけど悔しいかな、華やかな印象が彼の感じには合っている。

「本郷さんだって女の子なんだから、勝手に決めつけちゃダメですよ？」

彼は、自らの左右に立つ女子たちの肩に腕を回すと、顔を覗き込んで「ねえ？」と同意を求める。至近距離で目と目が合った子は真っ赤になって固まり、もう片方の子も、やはり顔を赤らめながら口元を手で覆う。

それ以外の子たちは――

「キヤーツ！ き、如月さん!？」

黄色い悲鳴を上げていた。

悲鳴を上げさせた張本人はといえば、名前を叫んだ女子に向かって平然と「はい、如月ですよ？」などと呑気に挨拶する余裕っぷりだ。

如月達貴――入社四年目の彼は、我が社の営業部のエースと呼ばれる若手の有望株。

営業成績トップの実績はもとより、百九十九センチ近くはあろう長身にすらりと伸びた手足と、アイドルのような甘いルックス。常に笑顔を絶やさず、上には可愛がられ下には慕われて社内でも人

気ナンバーワンを誇っていた。ついでに言うと、私が「サムライ王子」と呼ばれているのに対して彼は「正統派王子」と呼ばれている。

如月くんことは、彼が営業成績で頭角を現し始めた二年くらい前から知っていた。だからといって他部署の彼との関わりは薄い。社員食堂などで、若い女子社員たちに囲まれているのを見かける程度だ。如月くんにはいつも、受付や総務課のお化粧の派手な女の子たちの取り巻きがいた。

そんな彼の登場に、うちの女子たちが色めき立つのも無理はない。

「き、き、如月さん、どうしてここに……?」

肩に手を置かれた女の子が、真っ赤な顔をして狼狽えている。

そんな彼女の顔を見ていて、はたと気づく――今は勤務時間だ。

ついうっかり彼女たちと雑談してしまっただが、一歩引いて周囲をよく見てみれば、すでに仕事に取りかかっている同僚たち――特に男性社員が、冷ややかな目をこちらに向けていた。

「皆、お喋りはこれくらいにして自分の仕事に取りかかりましょう」

このままではいけないと、剣道で鍛えた鋭い声で場の空気を一気に緊張させる。

「これだから女は……」と男性社員に小言をもらわないよう早めに待ったをかけるのも、お局様の私の重要な役目だ。

女だから、という下らない理由で差別されないために重要なのは、仕事に対する真面目な姿勢。

私の一喝に後輩たちは心得たもので、すぐさま軽い会釈とともに己が席へと散っていく。

——他部署の、一人を除いては。

「えー？ 本郷さんだって、ついさっきまでお喋りしてたじゃないですか？ せっかくなんだから、もう少し俺と話をしてくださいよ」

「雑談の時間は終わったのよ」

ただでさえ遅刻によって時間をロスしているのに、これ以上の遅れはよくない。彼の存在は無視して、すぐさまデスクの上に資料を並べ作業に取りかかる。

「これが、本郷さんが今手がけている案件ですね？ 工程でいうと、六割つてところかな」

彼は相変わらず私のデスクの隣に立ち続け、興味深そうにパソコンを覗き込んできた。

「ここまでくれば、あとは他の人に引き継いでも大丈夫そうですね」

よくわからぬことを呟きながら、大事な資料をひよいと持ち上げた。

「ちよつと、邪魔しないでくれる？」

無視を決め込んでいたのだけれど、目を通していた資料を取り上げられては、さすがに反応せざるを得ない。取り返すために伸ばした手は、彼がさらに高い位置までプリントを上げたことで空を切った。

キツと睨み付けた先で、如月くんが人のよさそうな……いや、そう見せかけて裏がありそうな笑みを浮かべている。

「そんな目を向けられたら怖いですよ？ しっかし、製図の作業つてずっとパソコンと資料との睨めつこなんですね。そんなんだから目つきが険しくなっちゃうんですよ？」

「……ほつといてよ」

つり目で目つきが悪いのは生まれつきだ。目元に遮るものがあれば少しは印象が和らぐのではないかと仕事中は眼鏡をかけているものの、それが逆にクールできつい印象を与えられることもある。

「でも、本郷さんって眼鏡を外して髪型を変えたら雰囲気ガラッと変わりそうですね？ メイク次第では随分と化けそうな気がするな。まあ、今のままでも知的な美人さんって感じで嫌いじゃないですけど」

大して面白くもない話題でクスクスと笑っている相手に、イラツとした。  
——この男、私を馬鹿にしてる？

もしも私はまだ二十歳そこそこの小娘だったならば浮かれるのかもしれないが、今の私には嫌みにしか聞こえない。

三十路手前のお局様を相手に喧嘩を売るとは、いい度胸をしている。

そんなことを考えているうちに資料をデスクに戻した彼の指が私の眼鏡へと伸びてきたので、瞬時にバシッと払いのけた。

「……そもそも、どうして営業部の君が設計部にいるの？」

部署の中で話をしているのは私たちだけで、その他にはマウスを動かす音や、キーボードを叩く音くらいしかしていない。設計の部署というのは元々皆が無口で静かな場所なのだ。

そんなところに、べらべらと口ばかり動かす営業の男がいるのは不似合いだ。仕事の打ち合わせ



で来たであろうことは察しがつくものの、こんなところで油を売つてないで担当者に会つたらどうなのか。

それなのにこの男ときたら、動じず笑みを浮かべて叩かれた手を大袈裟にさすっている。

「ひどいなあ、仕事で来たに決まつてるじゃないですか」

「それはわかつてるけど、さっさと用事を済ませて自分の部署に戻りなさい」

「だから、用を果たすためにここで待つてるんじゃないですか。本郷さんもそれ、切り上げてくださいよ」

大事な仕事をそれ呼ばわりされて、さすがの私もカチンときた。

「どうして、私の仕事を他の者に引き継がないといけないの？」

この男と話していると、なんだか妙にイライラする。気が散るからどこかに行けと言っているのに、一向に理解する様子もなければなにが言いたいのかも要領を得ない。

——やっぱり、私を馬鹿にしている？

だったら面白い。その喧嘩、買ってやるうじゃない。

いよいよ立ち上がって一戦交えようかというとき、恰幅のよい中年男性たちがフロアに入ってきた。

「やあ、如月くん。お待たせして悪かったね」

「おはようございます、部長。全然待っていませんのでお構いなく」

「部長……」

そこにいたのは、我が設計部の部長と、営業部の部長。二人は睨み合う私たちに向かって、ほう、と感嘆の声を上げた。

「如月くんはもう本郷くんに挨拶していたのかい？ さすがに仕事が早いね」

「はい。もう準備万端ですよ」

私たち二人の顔を見ながらにこにこしている部長たちに、如月くんも満面の笑みで応える。

わけがわからないのは私だけのようだ。

「あの、部長？ 何のことでしょうか？」

「ああ、本郷くんには仕事の説明がまだだったね。実は——」

「は……？」

——それは、突然のビッグチャンスだった。

数年後、首都圏で開催される大規模な国際スポーツ大会。それに合わせて競技場の建設が開始されるのだが、我が社もそのコンペに参加することが、先日の役員会にて正式に決定した。

「担当者として、営業部から如月くん、そして設計部から本郷くんに携わってもらいたい。これは我が社にとって社運を賭けた一大プロジェクトだ。大変だろうが、引き受けてもらえるね？」

「……っ、光栄です」

名誉な仕事に、歓喜するとともに身が引きしまった。

ようやく、念願が叶うかもしれない……！

世界規模の祭典で使うような、大きな会場の建設に携わるといのが、この仕事を始めたときからの私の夢だった。

入社八年目にしてようやく巡ってきたチャンスに心が躍る。だが同時に、疑問も浮かんだ。「でも、どうして私なんでしょうか……？」

営業の彼はともかく、なぜ表舞台での経験の少ない自分が担当に選ばれたのだろうか。すると、部長の口から驚くべき事実が伝えられた。

「それは、如月くんの推薦なんだよ」

咄嗟に如月くんに顔を向けると、彼はやはり笑顔のまま私を見下ろしていた。

「僕には今回売り込むべき我が社の技術に関する知識が不足していますからね。だからこそ補佐役が必要なんです。それで、実績もあつて信頼もおける本郷さんを推薦したんですよ」

確かに、実務レベルの話であれば、彼よりも私のほうが経験がある。

——だが、釈然としない部分も多い。

これまでに彼と仕事で関わった覚えはなく、信頼に足りるようなやりとりをした覚えがないのだ。それに、実績というのは、要するにベテランということだろうが、私よりも経験値の高い男性社員だつて大勢いる。

なのに、どうして私なのか……？

それでも、自分の夢と不信感を天秤にかけた結果、私の選択肢はひとつしかなかった。

「わかりました。精一杯努めさせていただきます」

彼に対する不信感があつても、背に腹はかえられない。

こうして如月くんと、波乱の日々が幕を開けたのである。

私の勤める匠コンストラクションは、数ある建設業界の中でも体育館や博物館などを主に扱う中堅の建設会社だ。そのため、国際スポーツ大会の会場となる競技場もお手の物と言いたいところだけれど、今回のような大規模事業の入札に参加するには、それ相応の会社規模や実績が求められる。従つてうちのような中小企業には参加する権利すら与えられない。

「当然と言えば当然ですよ。何百億といった自社の資本金を軽く超える工事を受注して、万が一のことがあつても賠償できませんから。今回の話も、当然元請けは他にあります。うちは、その内の一社である日本トップクラスのゼネコン 朋興建設が行うコンペに勝ち、下請けとして事業に参加しようつてことです」

電撃的な大抜擢から数日。私は如月くんと一緒に電車で揺られ、元請け会社へと向かつていた。ゼネコンとは、総合建設業者のことを言う。発注者から工事を請け負い、専門工業者をマネージメントして工事の施工を監督するのだ。実際に建物を建てていくのはサブコンと呼ばれる専門業者たちになる。

営業知識のない私のために、パートナーとなつた如月くんは仕事の内容とおおまかな流れをレクチャーしてくれる。

「今回の事業を通しての俺たちの目標は匠コンストラクションを朋興建設のサブコンに組み込んで

もらうこと。そのために、まずは顔と名前を覚えてもらうべく、自分たちをアピールする……あ、チヨコ食べます?」

「いらない」

——電車の中でチヨコを食べるとか、子供か!?

そういうわけで、私と如月くんは、朋興建設に挨拶へと向かっているところである。

「でも、車じゃなくてよかったですか? 俺、免許を持ってますよ?」

「電車のほうが早いからよ」

車ではなく電車を選択したのは、如月くんの運転技術に疑問を抱いていたというわけではなく、単純に移動時間が早いから。

それに、午後の車内は朝に比べれば余裕がある。車窓の近くで景色でも眺めていれば、気の合わない後輩との道中でも少しは気が紛れるというものだ。

改めて隣に立ってみると、百七十センチの私よりもゆうに高い彼の身長は周囲よりも抜きん出ている。背筋もスツと伸びているから、立ち姿も様になっている。

「そんなに時間を切り詰めなくとも、今日は挨拶だけでもいいんですけどね。駐車場だって、あちらさんは自社ビルだから探す必要もないのに」

「この件に関して急いでいるわけじゃないわ。なるべく早く戻って、抱えている他の仕事を今日中には終わらせたいの」

完成までにあともう一息のところまできている仕事がある。如月くんとの案件を抱えながらこの

仕事を私が仕上げるのには若干のペースアップが必要なため、少しでも時間を切り詰めておきたい。

「引き継ぎしないんですか? あの仕事よりこっちのほうがでかい案件なんですよ?」

「仕事に大きいも小さいもないわ。それに、あと少しだから最後までやり切りたいの」

私の所属する設計部製図課は通称「図面屋」と呼ばれ、設計士がデザインした建築デザインをより精密に製図していく作業を担当している。

建物をひとつ建てるのに必要な設計図は数十枚から場合によっては数百枚単位にまで及ぶ。同じ場所であっても、見る角度を変えたり拡大したりとその都度図面が必要になるからだ。

私は仕事の正確性と仕上りの早さを買われ、お陰様で取引先から好評をいただいている。自分のことを信頼して任せてくれた案件を、他の人に任せるのは気が進まなかった。

「だからといって、こっちの仕事に手を抜くこともないから安心して」  
なにしろ、このプロジェクトには自分の夢がかかっている。

「本郷さんが手を抜くなんて考えてませんけどね。俺としては、車の中で二人きりでじつくりと親睦を深めたかっただけなんですけど。……あ、もしかして俺と二人きりになるのが嫌だったとか!？」

人が真面目に話しているのに、如月くんのノリは軽い。

「……それもあるかもね」

「ひどいなあ。パートナーなんだから、もっとお互いのことを知ったほうがいいと思いませんか?」

「思わない」

「そんな冷たいこと言わないでくださいよー。一緒に仕事をするんなら人間関係も円満なほうが絶対がいいですって」

それはそうだけれども、第一印象が好ましくなかったこともあり、どうしても彼に対しては苦手意識が先行してしまう。

だが、如月くんはどんなに私が怪訝な顔をしていてもまったく気にする様子はなく、子犬のように澄んだ瞳をまっすぐ向けてくる。

「それは……そうね」

諦めのため息を吐きながら言ったのに、如月くんはそれを了承と捉えたようで顔を輝かせた。

「ね、本郷さんはどうして建設業界に入ったんですか？」

「それは――」

私が建設の道を志したのは、幼い頃から習っていた剣道にルーツがある。

片親となつて経済的負担が大きい中でも高校卒業まで続けていたのは、父親の影響や心身の鍛練のためだけではない。

一歩足を踏み入れただけで自然と背筋が伸びる、剣道場の、あの独特な雰囲気が好きだった。

特に、大きな試合で使用される武道場の中には有名建築家がデザインしたものもあり、私はその建物に魅せられた。デザイン性の高い外観はもとより、高い天井に美しい模様を描く梁も壮観だ。

それらは不思議と私に安心感を与えてくれた。

試合前の緊張した気持ちや、勝ったときの嬉しさ、負けたときの悔しさ……

その時々の自分の気持ち次第で、見上げた天井はいつも違う顔を見せた。

「大学進学を機に剣道は引退したけれど、いつか自分でそういった施設を建ててみたいと思ったのだから、建築学科に進んだのよ」

「へえ、そうなんです。自分で設計してみたいとは思わなかったんですか？」

「そりゃ、最初のうちは思っていたわよ。でも今の仕事で、思いのほか自分の気質と合っていたみたい」

設計のイロハを覚えるためにと入社当初に配属された今の部署だったが、図面と向き合い細かい計算をしてコツコツと組み立てていく地道な作業は性に合っていた。

節約と計算は、幼い頃から身につけているのだ。

それに、納期が迫れば残業続きで時には徹夜もある体育会系な職場は、まさに自分にはうつつつけだった。

そんなことをしていたから、気がつけば女子では一番の古株になっていたのだけれど……

「本郷さんって、長女気質ですよ」

黙って話を聞いていた如月くんが急に小さく微笑む。

「真面目でしっかりしていて、お姉ちゃんって感じ。本郷さんがいつも凜としているのは、剣道を習っていたからなんでしょうね」

凜としているというのは褒め言葉なのかもしれないが、融通の利かないストイックな侍という見方もある。

この性格から、妹キャラだと思われたことは一度もない。お姉ちゃんならまだよくて、男らしいと言われることは最早、日常茶飯事だ。

本当に、生まれてくる性別を間違えたのかもしれない……

「でも、いくら武道の心得があるからといっても、痴漢と戦うのはほどほどにしてくださいね」  
ふいに、如月くんの声が低くなる。

これまでとは違うトーンに少し驚いて顔を上げると、彼は意外なほど真面目な顔をしていた。

「……どうして？」

もしもあのとき自分が助けなければ、被害を受けていた女性は一生消えない心の傷を負っただろう。それに、目の前で犯行が行われているのに見て見ぬふりをするのは、自分も荷担したのと同じじゃないのか。

私はキッと睨みつけたが、如月くんに怯む気配はなかった。

それどころか、まっすぐに向けられた真摯な表情に心臓が大きくトクンと音を立てた。

「だって、本郷さんが危険な目に遭う可能性だってあるじゃないですか」

心地よい低音が耳に響いて、目の前が大きく揺らぐ。

それは、気のせいではなく物理的に、だ。

次の駅が近づいたため電車の速度がゆっくりになって、よろけたのである。

次の瞬間。身体が、力強い腕に支えられた。

「ちよ、ちよっと……」

突然の出来事に動揺しているせいで声が上がってしまう。

——これって、抱き締められているようなものじゃない!?

彼はふらついた私を支えただけであって、今も他の乗客の邪魔にならないように身を寄せているに過ぎない。けれど、男性に免疫がない私は極度に緊張してしまう。

期せずして如月くんのスーツの胸元に添えてしまった両手。

彼の胸板は、意外にも硬く引き締まっている。

簡単にふらついてしまった私とは違って、如月くんは衝撃にも微動だにしなかった。

華奢だと思っていた身体は、体幹がしっかりとしている。それに、腰に回された腕だって筋肉質

で……って、私ったら、なにを考えてるの!?

「いい加減、離れなさいよ」

いつの間にか電車は動き出して、私たちの周囲には大人二人が立つのに十分なスペースが確保されていた。目の前の身体を押しつけようとするものの、これがまたビクともしない。

——ふいに、頭頂部になにか触れた。

「痴漢と戦って、あなたにもしものことがあったら、どうするんですか？」

彼の言葉に合わせるように、頭に吐息がかかる。

多分、私の頭に触れているのは、如月くんの唇だ……

私のように身長の高い女性は、男の人に頭のとっぺんを見られることは滅多にない。まして頭につきスされるなんて初めてのことで、動揺するのおおかしくはないだろう。

ただでさえドキドキとうるさい心臓に、如月くんはさらに追い打ちをかける。

「どんなに強くても……本郷さんは女の子なんですよ？」

甘いささやきに、不覚にも胸の奥がキュンと疼いてしまった。

——この男、天然ものの王子だ！

どんな女性に対しても紳士的で優しい言葉が自然と出てくるなんて、生粋の王子以外にあり得ない。

「お……女の子って、私はもうすぐ三十になるんだけどね？」

彼の発言に不覚にもときめいてしまったけど、私はいいい年をした大人だ。ちよつとくらい女扱いされたからといって、目に見えて狼狽えるわけにはいかない。

それに、からかわれているのかもしれないし……

無駄にジタバタと抵抗するのを止めたら、如月くんの腕からも力が抜けていく。緩んだ腕にゆつくりと手を当て押すと、簡単に身体から離れられた。

「それに、私より強い男なんてそうそういないのよ？ 如月くんなんて、身体も細いし喧嘩も弱そうじゃないの」

「そうですか？ こう見えて、格闘技とかも習ってるんですけどね」

下げた両腕を腰に当てて、如月くんがポーズを取る。それは往年のプロレスラーのような格好で、つい口元が綻んでしまった。

だってやっぱり、ちつとも強そうには見えない。

「ずっと好きな人がいて、その人のタイプは強い男だと聞いたんで、鍛えてるんです」

「へえ……」

私は如月くんのファンでもなんでもないから、彼に想い人がいると知ってもショックなんて受けるはずがない。

なのに、さっきまで高鳴っていた胸の鼓動が急速に静まっていく。

——好きな女の子、いるんだ……

社内の女子の人気を集めている彼だけれど、これまでに浮いた噂を耳にしたことはなかった。それに、社内外問わずモテるであろう彼が、好きな女性を振り向かせるために身体を鍛えているというのも、意外な話だ。

「格闘技って、どんな？」

恋愛話に首を突っ込む気にはなれなくて、特に興味もない格闘技の種類について聞いてみた。

「一応剣道も習ったけど、一番力を入れてたのは居合いかな？ あとは、空手、柔道、合気道、ジークンドー、混合格闘技とか、いろいろと」

すると、出るわ出るわ。しかも後半は聞いたこともない格闘技ばかりだ。

「……なんだか、珍しいものもあるわね」

「まあ、スポーツというより護身術というか、実戦的なものが多かったから——」

……はて。実戦的とは、なにかと戦うことでもあったのか？

もしかすると学生時代はいじめられっ子で、いじめっ子と戦うために格闘技を習っていたのだろうか。

あまりそういうタイプには見えないが、人は見た目によらないとも言うし、なんとなくこれ以上は立ち入ってはいけないような気もする。

急に黙り込んでしまった彼のことを、車窓越しにじっと見つめた。

黒目がちな彼の瞳はガラス越しでも存在感を放つ。時折額を覆う前髪をふわりと掻き上げる仕草なんかは様になっただけで、さすがに王子と称されるだけのことはある。

年下らしくあどけないかと思ったら、不意に男らしさを感じさせたり、急に無口になったりで、なんだか掴みどころがない。

さつきは一瞬ドキッとさせられたけど、彼を男性として意識することはないだろう。

入社四年目の彼は、ちょうど自分の弟と同じ年。だから絶対に如月くんを好きになることはないと思うのだけど……ほんのわずかな時間で色々な面を見てしまった私は、少しだけ彼に興味を持ち始めていた。

この不思議な感情の正体はなんだろうか。よくわからないものの、深追いする気もない。

その後、目的の駅に着くまで、私たちは無言のまま電車に揺られた。

電車を降りた私たちは、朋興建設の本社ビルの前へとたどり着いた。

日本有数のゼネコンだけあり、地上三十階建ての自社ビルはなかなかの存在感だ。いざ目の前に

すると迫力がある。

この胸の高揚感こころのうきかたは剣道の試合前に似ている。私はこんなに大手の会社を訪問するなどほぼ初めて、実のところ、緊張していた。

一階の受付でアポイントメントを伝えると、そのままロビーの応接セットへと通された。担当者を待つ間に、如月くんが口を開く。

「朋興の責任者さんとうちになにか繋がりがないかと調べたら、その人と本郷さんって偶然にも同じ大学だったんですよ」

「……なるほど、それもあつて私を指名したのね」

この業界は妙に体育会系なところがあつて、縦の繋がりや同族意識が強い。同じ大学出身というのは話のきつかけになりやすく、貴重な武器だ。

「でも、同じ大学だからといって知り合いとは限らないわよ？」

「とりあえず顔と名前を覚えてもらうきつかけになればいいんですよ。でも、念のため……責任者は三枝晃司さんえきこうじって人なんですけど、知ってます？」

「え、三枝先輩……!？」

久しぶりに聞くその名前に、ついつい声が大きくなった。

「……知り合いなんですか？」

「同じゼミの先輩なの。私より五つ年上だから顔を合わせることは少なかったけど、院生だった先輩がよく教授のアシスタントをしていたから。ただ、向こうが私を知っているかどうかはわからない」

いけれど……」

三枝先輩は、なにを隠そう大学時代に憧れていた人だ。だから私は三枝先輩のことをよく知っている。

アメフト部に所属していて、よく鍛えられた筋肉に高身長。日焼けした肌から覗く白い歯が爽やかで、スポーツマンの王道を行く風貌はとにかく目を惹いた。

分厚い胸板、太い二の腕、逆三角形のフォルム——男らしくて逞しい先輩は、まさに私の理想にドンピシャだった。

夢だった仕事に、憧れの先輩。——これは、ついに私にも運が巡ってきた!?

私の反応に如月くんの眉がひそめられたのだけれど、予期せぬ再会に浮かれていた私は、さして気に留めていなかった。

「まさか本当に知り合いだったとは、想定外……」

彼が小さく呟いたとき、ロビーの向こう側にあるエレベーターから、一際体格のいい男性が降りてきた。

「——あっ」

私たちの姿を見つけた男性は、スポーツマンらしく小走りでこちらに駆け寄ってくる。

その一步一步が、私にはまるでスローモーションのように見えた。

「匠コンストラクションの如月さんですか？ お待たせして申し訳ありません」

色黒の肌に白い歯を輝かせながらやって来た男性から発せられたのは、聞き覚えのある声。

ああ、間違いなく、三枝先輩だ……！

あの頃はラフなTシャツやポロシャツ姿だったのが、すっかりスーツが板についている。だけど、日焼けした肌や、ワイシャツのボタンがはち切れんばかりの分厚い筋肉は当時のままだ。

久しぶりに会う憧れの人は、昔に比べてさらにどストライクな見た目になっていた。

年齢を重ねたことで男の深みが増している。パワー溢れる二十代とはまた違った、大人の色気を醸し出していた。

「お忙しいところをおそれいます、匠コンストラクションの如月です」

如月くんがスーツの胸ポケットから名刺入れを取り出すのを見て、慌てて私もそれに倣う。

「ほ、本郷です、よろしくお願います……」

「ご丁寧ありがとうございます。担当の三枝です」

先輩はにっこりと微笑みながら私の名刺を受け取った。その先輩が不思議そうに尋ねる。

「私の顔に、なにかついていますか？」

「あっ、いえ、失礼しました」

——いけない、つい見入ってしまった！

急いで先輩の顔から目を逸らし、先ほど交換した先輩の名刺に視線を落とす。

肩書きは課長。一流大学出身者がひしめく大手ゼネコンにおいて、なかなかの出世だと思われる。強靱な肉体に加え収入も安定しており、社会的地位もあるなんてすごい。三十歳を目前にして、憧れの相手と再会できた感動に、その後の社交辞令的なやりとりは私の耳を上滑りしていくだけ



だった。

「本郷さんって、ああいうのがいいんですか？」

帰り道、どことなくテンションの下がった如月くんに問いかけられた。

あれほど早く帰って残りの仕事を片付けたかと思っていたのに、今はこのビルを出るのに名残惜しささえ感じている。あちらは大手のゼネコンの営業で、ビッグプロジェクトを抱えるエリートなのだから、打ち合わせ時間が限られてしまうのは致し方ないのに。

「あの人は本郷さんになんの反応もありませんでしたけど」

「仕方ないわよ……」

私の名前を聞いても顔を見ても、残念ながら先輩は私を覚えてはいなかった。私と先輩の繋がりを期待していたはずの如月くんも、会話の中で一度もそのことに触れなかったのは、微妙な空気を感じ取ったからに違いない。

それもそのはず。だって、先輩と会話らしい会話をしたのは、今日が初めてだったのだから。

先輩に憧れてはいたが、アプローチをしたことはない。剣道の対戦相手と向き合う心構えは持っているけれど、好意を抱いた相手とどう接していいのかはまるでわからないのだ。

道場の仲間やただのクラスメイト、職場の同僚という関係であれば男女分け隔てなくコミュニケーションもとれるのに、そこに恋愛感情が絡んだだけで途端にダメになってしまう。これこそが、私が今まで誰ともお付き合いできなかった最大の要因だろう。

一方的に見つめるだけで、話しかけることなんてできなかった。

それが、今になって再会できるなんて――

「ふーん。俺には脳筋ゴリラにしか見えませんでしたけどね」

「……っな」

――ゴ、ゴリラ、だと!?

人の理想の相手に向かってなんでも言うんだ。許せん!

振り返ると、如月くんは両手を頭のうしろで組んで、だるそうに歩いている。

「素敵な男性だったじゃない。社会的地位もあるし、君よりよっぽど頼りがいがあるように見えたけどね」

「えー、だから俺、鍛えてますって。なんなら脱いでみせましょうか？」

「脱がなくてよろしい! そそもも君はまず、その軟派な態度をどうにかしなさい」

ジャケットに手をかけて本当に脱ごうとする彼を一喝して、これ以上構うものと歩調を上げる。「でもこれ、わざとなんです。可愛い弟キャラのほうが、お姉ちゃん気質の本郷さんには親しみやすいかと思って」

早足で追いついてきた如月くんが隣にピッタリと並ぶ。

確かに、彼の前では緊張しない。でもそれは親しみやすさからではなくて、如月くんに対して恋愛感情を抱いていないからだ。

「弟には見えなくてもいいけど、社会人としてはどうかと思うわ」

彼の態度は、母や私の前ではわがまま放題の弟を彷彿とさせた。でも、弟だって外ではちゃんと社会人としての顔を持って、立派に会社勤めをしている。

「そうですか……。なんとなく男性が苦手そうに見えたから、同じ年の弟さんっぽくしてみたんですけどね」

——はて？ 如月くんとうちの弟が同じ年だなんて、話したっけ？

それに今の説明だと、まるで彼は私のためにキャラ作りをしているような口ぶりだけど……

だがそんな疑問を口にする間もなく、話題は次へと移る。

「本郷さんは、男性には社会的地位があるほうがいいんですか？」

「ないよりはね？」

母子家庭出身を舐めるな。有り余るほどの財力までは望まなくとも、お金がなくて苦労するのはできる限り避けたい。

父の死後に苦労してきた経験は、私の根底にしっかりと根付いている。

「だったら俺にも、まだチャンスはあるかな……？」

——如月くんの声はオフィス街を吹き抜ける風にかき消され、はっきりとは聞き取れなかった。

## 第二話 夢のような初体験

『はい、本郷です』

電話の向こうから聞こえてきたのは、妹の真奈美の声。受話器を通して聞く彼女の声は母に似てきていて、随分と成長したと改めて実感させられる。

「もしもし？ 私よ」

『あ、お姉ちゃん！』

妹の声がワントーン明るくなった。

八歳下の妹は現在大学四年生。そんな年になってもまだ姉からの連絡に喜ぶのかと思うと嬉しくなって、自然と顔が綻ぶ。

実家には今、母と弟、妹の三人が暮らしている。

私が一人暮らしをすると決めたとき、弟は高校生、妹は中学生で、彼らを残して家を出るのはあまりに忍びなかった。だけど費用や通勤時間を綿密に計算した結果、現在の形が一番ベストという結論に至ったのだ。

『どうしたの？ 電話なんて珍しいね。なにかあった？』

無邪気な妹に、用件を伝えることを一瞬躊躇した。

「実は明日、急な用事が入って帰れなくなったの」

『えー!?!』

心底ガツカリしたような声に心が痛む。けれど、これも仕事なのだから仕方がない。

——事の発端は、昨日のことだった。

『は？ パーティー？』

パソコンに向かって一心不乱に図面を入力していた私のもとへ、ふらりと如月くんが現れた。そして彼は手にしていた封筒をこれ見よがしに振りかざした。

『そう。朋興主催のパーティーが来月あるんですけれど、そこに三枝氏も来るんです。お近づきにならないものかと画策した結果、潜り込めることになりましたー!』

『……声が大きい』

それはつまり裏でこそそと手を回したということなのに、こんな大々的に発表してどうするつもりだ!?

チラチラとこちらに投げられる同僚たちの視線が気になって、如月くんの腕を掴むと設計部のフロアを出て、同じ階の隅にある自販機コーナーまで引つ張っていった。

自販機と背の高いテーブルがひとつ置かれたスペースには、私たち他には誰もいない。

如月くんは相変わらず黒目がちな瞳をキラキラと輝かせながら、手柄を褒めると言わんばかりに胸を張り続けている。……犬か、君は？

『伝手を頼って苦労してゲットしたんですよ？ すごいと思いませんか?』

『あー、はい。エライエライ』

一応褒めてやると、如月くんの背後にぶんぶんと左右に揺れる尻尾が見えた。

だが突然、幻覚の尻尾がピタリと止まる。

『でも、ひとつ問題があって。このパーティー、ドレスコードがあるんですよね。本郷さん、ドレスとか持ってます?』

『持つてるわけではない』

同僚の結婚式のために購入したセブレイトスーツの類いならあるが、それ以外は着たこともない。

第一、ドレスなんてキアラじゃない。

——でも、本当は私だってドレスを着てみたい。いつか自分の結婚式では……と密かに憧れている。

キアラ的には白無垢に緋帽子に文金高島田のほうがしっくりきそうだが、ウエディングドレスでお姫様抱っこかされてみたいの……!!

そんなことを考えていると彼は、なぜかパアツと顔を輝かせた。

『ですよね？ だから、一緒に買いに行きましょう!』

『——は？ 今から?』

『嫌だなあ。仕事中に堂々とショッピングなんて、サボりですよ?』

腰に手を当てた如月くんが、サボりはダメだと偉そうに首を振る。

——くっ、なんか調子狂う。

『今度の土曜、予定はありますか？』

如月くんが指定した土曜日は、実家に顔を出すことになっている。

まあ、どうしても帰らなければというわけでもないけど……いや、それよりも。

『買い物はいいとして、どうして君と一緒に出かけなきゃならないの？』

『だって一応パートナーとして同伴するんですから、ちぐはぐな格好をしていたら可笑しいじゃないですか。それに、出席者は朋興を筆頭に一流企業ばかりで、量販店にあるような服ってわけにはいきませんよ。本郷さん、一人で百貨店とか行けます？』

——うっ、なんで私の考えをお見通しなのよ!?

私の買い物定番は、値段が手頃で良心的なお店。たまに百貨店に足を運ぶことはあっても、身体に染みついた貧乏人根性のためか萎縮してしまうのだ。

そんな私の心情を察してか、如月くんは知り合いの店を紹介してくれるという。

『俺、百貨店に当てがあるんですよ。知り合いだから少しは融通もつけてもらえるし、心強いと思いませんか？』

如月くんの身につけているスーツは、仕立てのよいものばかりだ。営業という仕事柄、身につけている服や靴などを見られることも多いだろうし、人一倍気を遣っているに違いない。

ならばここは、彼の顔を潰さないためにも、彼の方針に従おう。

郷に入っては郷に従え。ちゃんとしたパーティーに出るのであれば、それなりの格好はしなくてはならない。  
はならない。

『……わかった』

というわけで、私は実家への帰省をキャンセルすることにした。

よくよく考えてみれば、どうして一か月も先の予定の買い物をすぐしなければならぬのか疑問だが、当てを紹介してもらったから彼に予定を合わせるべきだ。

『でも……明日は、お姉ちゃんの誕生日なのに』

——そう。明日は、私の三十回目の誕生日である。

「もう祝ってもらうような年でもないから」

弟や妹の誕生日であればなにがあっても駆けつけるが、さすがに自分の、しかも三十回目のなんて、嬉しくもなるともない。

だから、今回のことはいきつかけかもしれない。

さすがに三十歳にもなって、家族で誕生日パーティーはちよつと……いや、かなりイタイ。

そんな姉の複雑な胸中を知ってか知らずか、突然妹の声が鋭くなった。

『ねえ、お姉ちゃん。用事って本当に仕事？ もしかして、デートなんじゃないの？』

「バ、バカな！ そんなわけないでしょう!？」

——なにを急に言い出すの!？」

『えー、そうやって慌てて否定するところが怪しいな』  
想定外すぎて動揺しただけに、妹は勘ぐったようだ。

『本当に、仕事なのよ？ デートなんかじゃないもの……』

仕事を強調したことで、自分で落ち込んでしまう。

だって、三十歳にもなって、家族しかお祝いしてくれる相手がいらないなんて……空しい。

そんな私に、妹はさらに追い打ちをかける。

『ふーん……まあ、いいや。お姉ちゃんのを中止にするなら、次の私の誕生日も家族で祝うのはやめて、彼氏と過ごしてもいいよね!』

「——は？ か、彼氏!？」

突然の爆弾発言に、落ち込んでいた気持ちが一気に吹き飛ばされた。

「あんだ、彼氏がいるの!?」 どの馬の骨よ、お姉ちゃんは聞いてないんだけど!？」

『聞いてなくて当たり前でしょ、言っていないもん。あー、よかつた。これで私も堂々とデートできるー!』

家族で計画していた私の誕生日パーティーがキャンセルになって落ち込んでいるかと思った妹が、語尾に音符でもついていそうな勢いで喜んでいる。

「ちよつと、真奈美!？」

『——もしもし、姉貴？ 明日帰ってこねえの?』

いくら呼びかけても返事をしない妹に代わって電話に出たのは、弟だ。

「ま、真弘!? 真奈美、彼氏がいるの!？」

妹の身に起きている一大事に取り乱す私に対して、電話の向こうの弟から乾いた笑いが聞こえた。

『なんだよ今さら。あいつにだって彼氏の一人や二人くらいいるだろうよ』

「ふ、二人もいるの……!？」

二股なのかと慌てふためいていると、弟からは冷静に『いや、同時に付き合ってるわけじゃないから』と突っ込まれた。

「真奈美に彼氏がいるなんて聞いてないんだけど？ どんな男なの!? ちゃんとしている人なんですよ!？」

可愛い妹が、海のものとも山のものとも知れない男に捕まったのではないかと考えるだけで背筋が凍りそう。

こうなったら、今すぐにも実家に帰って、どんな相手かしつかり見極めなくては……!？」

『そんなに心配しなくても、あいつだってわかっているよ。人のことより、自分の心配したら?』

「なんでそんなに冷静なのよ……はっ、もしかして、あんだも……?」

『それは、ご想像にお任せします』

「ちよつと、真弘!？」

思わせぶりの台詞を残して、逃げられてしまった。

電話の向こうでは、楽しそうな弟と妹の笑い声なんかがして……やっぱり買い物なんてキャンセルして、今すぐ実家に帰らなくて! と思ひ直す。

『もしもし、真純ちゃん？ 明日デートなんですってえ？』

「お母さん……」

ヒートアップした私の耳に飛び込んできたのは、どこか間の抜けた母の声だった。

『真純ちゃんにも、やつといい人ができたのねえ。まったく男つ気がないから、本当はちよつとだけ心配してたのよ？ お母さん嬉しいわあ』

この、のんびりおっとりとした話し方。私の母は、私とはまるで逆の性格の間である。

父と母の馴れ初めも、交番勤務だった父のもとに落とす物や迷子やらでしょつちゅう母が顔を出していたことらしい。迷子って……子供じゃないんだから。どれだけドジっ子なのよ。

そのため父が急逝して母が働きに出ることが決まったときには子供ながらに心配した。

「お母さん、私、デートじゃないから……」

『隠さなくてもいいのよお。真純ちゃんももういい年なんだから、お誕生日くらい好きな人と一緒に過ごさなさいな。お母さんが真純ちゃんの年の頃には、もう真奈美だって生まれていたんだからね』

そう。母は二十歳のときに父と結婚した。……っていかお父さん、交番に来た相手に手を出すってどうよ？

知り合ったときははいったいくつだったんだ、なんて質問は怖くてできない。

『それに、真弘や真奈美だってもう子供じゃないんだから、そんなに心配しなくても大丈夫。あの子たち、お姉ちゃんを追い越して結婚するのは忍びないって思っているんだから、なるべく早く安

心させてあげてちょうだい？ じゃあね』

——ブツリ。

言いたいことだけ言って、母は勝手に電話を切ってしまった。

この親にして、あの子たちあり……通話終了を告げる電子音が、もの悲しさを掻き立てる。

私、弟妹にまで心配されていたのか……

いつまでも小さいと思っていた弟と妹が自分よりもずっと進んだステージにいるということに、シヨックを覚えた。

いつかは自分の家庭を持ちたいとは思っていても、ずっと色恋沙汰とは無縁の生活を送ってきたから、どうやって恋愛を始めればいいのかわからない。とはいえ彼氏がいなくて不自由することなんてないし、本当は、心のどこかで、もうこの先一人で生きていかなくはいけないんだと覚悟はしていた。

このままだと確実に弟や妹に先を越されて、二人の結婚式に出る日も近い……？

未婚で留め袖は——やっぱり、悲しい。

でも、本当に明日はただの仕事だもの。それに、如月くんとデートなんて考えられない。だって私のタイプは、三枝先輩みたいな……

そこで、ハツとした。

そうだ、そもその出かける理由が先輩に会うためのパーティー用ドレスであることを、すっかり失念していた。

明日買うドレスは、つまりは先輩のためのものなんだ……!

脳天に雷が落ちたような衝撃を受けたあと、急に視界が開けていくような気がした。

——始めればいいんだ、三枝先輩と。

三十歳の節目を迎える誕生日。その日を、新しい自分に生まれ変わる日にすればいい。そう考えると、明日が楽しみに思えてきた。

百貨店での買い物ならば開店と同時にいいのに、如月くんは午前中に用事があるとのこと、待ち合わせは午後になった。

現地集合にしようと、どこに行くのかを何度尋ねても「ヒミツです」とはぐらかされ、仕方なく私のアパートの最寄りの駅で待ち合わせる事になった。

まあ、なにを着ていけばよいのかと頭を悩ませていたので、待ち合わせが午後なのはありがたい。それは決して、デートの服を選んでいからではない。

着飾って「そんなに楽しみにしてたんですか?」とからかわれるのは嫌だが、貧相な格好では百貨店には入りづらい。

あれやこれやと検討した結果、白のアンサンブルニットに黒の七分袖パンツという無難な格好に落ち着いた。髪もいつも通りにひとつに結び、予定の時間よりも少しだけ早く待ち合わせ場所に着く。……規律を重んじる体育会系としては、如月くんを待たせるわけにはいかない。

駅前には、まだ如月くんの姿はない。辺りを見回すと、ロータリーに一際目を惹く鮮やかなブ

ルーの車が停まっていた。

車には詳しくはないが、大きくて立派なのでかなりの高級車だろう。その証拠に、通り過ぎる人たちがチラチラとその車に視線を向けている。

どんな人が乗っているのか気にはなつたけれど、覗き込むのは不躰なので前を向いて通り過ぎようとしたら、小さくクラクションを鳴らされた。

運転席に座っていた人物と目が合い、思わず目を瞠る。

そこにいたのは、飼い主を見つけた犬みたいな顔の、如月くんだった。

ブンブンと手を振っていた如月くんは、急いで車のドアを開けて外に出た。

「行き違いにならなくてよかった。おはようございます、真純さん。さあどうぞ」

間近に来た彼は、はにかんだような笑みを浮かべている。

「お、おはよう……? っていうか、どうして急に名前で呼ぶのよ!」

あまりにも自然に言うものだから、見過ごしそうになったじゃない!

「ずっと下の名前で呼んでみたかったです。今日は休日だし、いいじゃないですか」

如月くんは平然とそう言うけど、気恥ずかしくいきなり受け入れられるものではない。でも今は、ほかにもいろいろ気になることがあり、ひとまずこの話題は横に置いておくことにする。

「それにこの車、どうしたの?」

近くで見れば見るほど立派な車は、おおよそ一介のサラリーマンに手が出せるようなものには見えない。

「どうしたって、俺の車ですよ？ まあ、買ったのは親父ですけどね」  
質問に答えながら、如月くんは私の背中に手を添えて助手席のドアを開ける。そのエスコートは流れるようにスマートで……大人しく、乗らざるを得なかった。

外観に違わず車内は広く、飾りつ気はないが黒のレザーシートがやたらと高級感を漂わせている。こんな車をボンと購入できるとは、彼のお父さんはいったいどんな仕事をしているのだろうか？  
「如月くんのお父さんって、なにをしている人なの？」

「ああ、えつと……ちよつとした、会社経営？ 車は多分、趣味です」

——ちよつとした規模の会社を経営しているくらいで買える車には思えない！

彼の言葉はなんだか妙に歯切れが悪く気になった。けれど私を座らせた如月くんは、さつさと運転席に戻って車を発進させたものだから、私も慌ててシートベルトを着けた。

高級車は動き出しもスムーズで、音も静かなんだな。車内のBGMは、落ち着いた昔の洋楽っぽいものだ。

「自分で買った物でもないから普段はあまり乗らないんですけど、あれこれ移動するなら車のほうが楽かと思つて。でも、運転技術は信用してもらつて大丈夫ですよ」

そう言つて如月くんはダッシュボードに置いてあつたサンングラスをかけた。  
これがまた、彼のはつきりとした顔立ちに似合っている。

——もしかして、さつき駅にいた人たちは車じゃなくて車内の彼を見ていたのだろうか。

今日の如月くんは、白のバンドカラーシャツに紺色のジャケット、黒のスニーカーというシンプル

な出で立ちで、会社にいるときよりも落ち着いて見える。ハンドルを握る手は意外と大きくて、指は細いけれど骨張つた感じがなんだか力強く思えなくもない。

「どうかしましたか？ なんだか大人しいですね」

「……なんでもないわ。細い腕だなんて思つてただけ」

急に話しかけられてドキツとして、つい憎まれ口を叩いてしまった。

「ひどいなあ。これでも鍛えてるつて言つたじゃないですか。今日も午前中はジムに行つてきたんですよ？」

彼の午前中の用事というのはジム通いだつたらしい。鍛えているとは聞いていても、ジムに通っているという話は初耳だ。まあ、お互いのことをそんなにいろいろと話した覚えもないから、当たり前だけだ。

「もしかして、私の言つたことを気にしてジムに……？」

ふと、私が先日散々細いだの喧嘩も弱そうだのとけなしたことが原因かと気になつてしまった。

「違いますよ、ただの日課です。もう四年も前から、休日には通つてるんです」

四年前というと、ちょうど彼が入社した頃だ。サラリーマン、特に営業は身体が資本。日頃から運動して体力づくりを欠かさないのは、よい心がけだ。

「そんなこと気にするなんて、真純さんは相変わらず優しいんですね」

こちらを向かずにクスリと笑つた横顔がなんだか大人びていて、不覚にも胸がときめいてしまった。



相変わらず、というほど普段の私を知らないのでは、と彼の言葉に引つかかるものはあっても、そんな些細なことを気にする余裕もない。

「べ、別にそういうわけじゃないわ。ジムに通って疲れているなら、わざわざ今日じゃなくてもいいんじゃないかと思っただけよ」

「平気ですよ。それに、トレーニングの後にはスパに行きましたから汗の臭いも心配いりません」

——なんだか、急に女子力が高いな。

「……汗臭いのは剣道で慣れている」

「そうですね。でも、せっかく真純さんと二人なのに不快にさせてしまうのは、俺が嫌だったんで」

いつもは彼の軽口を不満に思うこともあるものの……今日の如月くんにそういう雰囲気はない。それどころか、会社で見かけるときとはまるで別人のようだ。

先日の朋興建設への挨拶のときも思ったが、改めて見ると社内の男性人気ナンバーワンは伊達ではなかった。端正な顔立ち、特に面食いでもない私であっても素直に綺麗だと思う。運転する姿は頼もしく、なんだか妙に異性を意識させられるというか……

——ちよつと待つて。そういえば私、こういうシチュエーションで初めてじゃない!?

仕事で男性と車に乗ることはあつても、私服で休日というのは、真正正初初めての経験だ。

それに気がついたら、いくらデートなんかじゃないと自分に言い聞かせていても意識してしまう。流されるままについ助手席に乗ってしまったけど、座る位置ってここでよかったの!? 後部座席

のほうがよかつたんじゃないの!?

「急に百面相してどうしたんですか? 珍しく、顔に出てますよ」

「な、なにが!？」

しまった。いつものポーカーフェイスが、崩れかけていたらしい。

こんなことで動揺しているなどと悟られるのは恥ずかしい。

——平常心、平常心。心頭を滅却すれば火もまた涼し。

心を落ち着かせ、背筋を伸ばした私を横目に、如月くんが小さく苦笑する。

「あれ、もう戻っちゃった。もう少し肩の力を抜いてもいいと思うんですけどね」

「これがいつもの私だから、お構いなく。それより、目的地はどこなの?」

「もうすぐ着きますよ」

その言葉の通りに、車は高級百貨店やブランドショップの立ち並ぶ繁華街の大通りを流れるように進んでいく。如月くんは、その中でも一際大きい老舗百貨店の地下駐車場へと車を滑り込ませた。あまり経験はないのだけれど、普通は入り口で駐車券をもらって、表示に従って空きスペースを探すというのが一般的だと思う。なのに如月くんは、迷うことなく一般の車とは別の方向へと車を向かわせて、警備員に誘導されつつ、広々としたスペースに停車した。

「車の規格が一般の駐車場向きじゃないんですよ。それに、知り合いがいるって言ったでしょう?」  
不審がるというより不安がっている私に、如月くんはそう説明してくれたけれど、様子が違うのはそれだけではなかった。

車を降りた如月くんは、これまた一般用とは違いそんなエレベーターに乗り込むと、迷うことなくボタンを押した。

百貨店のエレベーターは、あちこちの階に停まったり、到着しても人がいっぱい乗れないこともある印象だったが、意外なほどにスイスイ進む。

「ねえ、これ何階に向かっているの？」

「十一階です」

建物は十三階までで、上の二つはレストランフロア。十一階は催事場<sup>さいじじょう</sup>があつて、ナントカ物産展とか全国ナントカ大会とかをやっているイメージなんだけど、婦人服が売っているものだろうか。

「婦人服フロアって、もつと下の階にあるものじゃないの？」

一階が化粧品やバッグ類、二階・三階がレディースフロア、上に近づくごとに年齢層も上がって値段も上がるといのが私の百貨店に対するイメージだ。

「カジユアルウェアはそうですけど、今日はパーティー用のドレスじゃないですか」

なるほど、フォーマルドレスだから高層階にあつてもおかしくないのか。

ニッコリと笑って余裕な如月くんに先導されて降り立った十一階には、大きな催事場<sup>さいじじょう</sup>があつた。

今は大きな催し物もなく、閑散<sup>かんさん</sup>としている中、如月くんの後を追う。その先にあつたのは、「ゲストラウンジ」と書かれた別区画への入り口だった。

——もしかしてここは、お得意様専用のVIPルームとかいうところじゃないの!?

「き、如月くん？　ここで、合ってるの？」

もう、不安どころの話ではない。噂には聞いたことがあるけど、株主だとか上位ステータスのクレジットカードを持つているとか、選ばれた人間しか立ち入ることのできない聖域なんじゃないのか。貧乏人の私が怯まないはずがない。

「仕専用のスーツとかを作る関係で、いつの間にか使えるようになっただけです。ここなら周囲を気にせずに買い物できますよ」

ガチャリと開いた扉の先では、上品なスーツ姿のダンディなおじさまが私たちを……いや、如月くんの到着を待っていた。

「いらつしやいませ、お待ちしておりました。お久しぶりですね。お父様はお変わりございませんか？」

「ご無沙汰<sup>ぶさた</sup>します。父も相変わらずですよ。今日はよろしく頼みます」

如月くんが挨拶<sup>あいさつ</sup>すると、おじさまは嬉しそうに目を細めて、それから私に対しても軽く会釈<sup>えいせき</sup>した。多分、うちの部長と同じくらいの年齢だと思う。自分より目上の人間にこういう扱いを受けた経験のない私は、やつぱり萎縮<sup>いじく</sup>してしまう。

……如月くんはなんともない様子でおじさまと雑談しているけど、お父様の知り合いのようだから、付き合いも古いのかな。それとも、第一線の営業マンというのは、そういうものなのかしら？　ラウンジの中には先日の朋興建設のロビーで見たものよりも立派な応接ソファが等間隔<sup>もちかか</sup>に設置されていた。おじさまはなぜかそこを通り抜けて、さらに奥にある個室へと繋がる<sup>つな</sup>ガラス戸の中に私たちを案内する。

「フィッティングがあるから、個室のほうがいいですよね？」

なんて如月くんが聞いてくるけど、もう、どうでもよくなってきたかもしれない……

個室には外にあつたのと同じようなソファセットがあつて、如月くんはそこに腰を下ろすと私にも隣に座るよう促した。

正直、もうなにも考えられなくて素直に座ると、ほぼ同時にドアが開いてティーセットを持った女性が現れる。目の前に並べられた陶器のカップから上品な紅茶の香りが溢れる。添えられたお茶菓子も、うちの会社が商談時に出すものより何倍も高そうだ。

ああ、至れり尽くせり過ぎて、ダメ人間になってしまいそう……！

「それじゃ、この前電話でお話した通りでお願いします」

一息吐いた頃、如月くんがおじさまに向かつて話しかけた。

「それでは始めましょうか」

おじさまがガラス戸の向こうに合図をすると、女性が二人室内へ入ってくる。なにもかもタイミングが完璧で、まるでお芝居のようだ。

彼女らはしずしずと入室を済ませると、私の真横に立った。

彼女たちの手に握られているのは……メジャー？

「え？ な、なに!？」

メジャーを持つているということは、採寸されるってことだと予想ができる。でも、どうして身体のサイズを測られなきゃいけないの？

「真純さんはここで洋服を買うのは初めてなんだから、きちんとフィッティングをしないとサイズがわからないじゃないですか」

ティーカップを持った如月くんがにこやかに微笑む。

言われてみれば、普通の洋服とは違うから、MサイズとかLサイズとかで済ませられないのだからうけれど……

「ここで測るの!？」

「俺は構いませんよ。ああ、でも須藤さんには席を外してもらいましょうか」

「かしこまりました」

どうやらおじさまは須藤さんというお名前らしい。……ってそういうことはどうでもよくて！

「如月くんがいたら、私が構うの!」

いくらなんでも、彼の目の前で服を脱いで測るといふことはないと思う。

でも、如月くんが近くにいたら、サイズがバレバレじゃないの!

それはイヤ、スリーサイズを知られるなんて、絶対イヤ。

「冗談ですよ。そのためにフィッティングルームがあるんですから、俺はここで待ってますので気にせずどうぞ」

本気で焦る私に、如月くんはクスクスと笑う……遊ばれてるわ、完全に。

個室の中には、きちんと仕切られたフィッティングルームがあつて、採寸はそこでやってもらふことになった。

でも、このフィッティングルームというのがまた普通の試着室と違う。大人が三人入っても余裕の広さで、パイプハンガーと、ご親切に椅子とメイク台まで設置されている。

「せっかく別室に移りましたので、やはり服を脱いでから測りましょう。ドレスは身体にフィットするものを選んでほうが美しいですから」

メジャー片手に笑顔で迫られ、仕方なく、下着姿になった。

女同士だから恥ずかしくはないけれど、私、胸ないのよね……

「あら、お客様。ブラのサイズが合っていますね。それに今はノンワイヤーのものをお召しですが、ドレス用の下着はワイヤー入りになります。金属アレルギーなどございますか？」

「いや、ありません……」

ノンワイヤーは、単に楽で値段も手頃という理由で選んだに過ぎません。

「では、ドレスの件もありますのでちゃんとしたものにしましょう」

ささっと胸元と腰回りにメジャーを当てた一人がなにかを伝えると、もう一人はそそくさと出て行った。しばらくすると、彼女はいくつかの下着と洋服を手にして戻ってくる。

——こうなったら隠すものなどない。

開き直って思う存分好きにしてみよう。私は、まな板の上の鯉になる！

かくして下着から総取っ替えされた後、二人に身体の隅々まで採寸されてから、ようやくお着替えタイムが始まった。驚いたことに、きちんとサイズを測った結果、私の胸のサイズはAからBカップへアップした。

あとはドレスをちやちやつと決めて……と思っていたけど、そこからがまた、長かった。

「お客様は長身でいらっしゃるので、ドレスの丈は長めでもよろしいかと思えます」

フィッティングルームを出て、すぐ傍にある大きな姿見の前に誘導された。

「うん、スタイルは申し分ない。でも、もう少し短いものもあるかな？ あと、色も変えてほしい。

青とか紺とかも用意してくれますか」

「かしこまりました」

指令を受けた一人がささっと退室していく。指示をしているのは私ではなく、なぜか、如月くんだ。

いちいち着替えるごとに、彼女たちは如月くんの前へと私を立たせた。その都度彼はあれやこれやと注文をつけて、その服が届けられるとまたフィッティングルームへ逆戻り、の繰り返し。気がつけば、パイプハンガーには赤、黄色、緑、ピンクと色とりどりのドレスが並び、今着ている青色のと合わせれば全部で五着。……私は、地球を守る戦隊ヒーローにでもなるのか!?

私の意見がまるで無視なのは、この際よしとしよう。なぜなら私は自分のバストサイズさえ把握できていなかった無頓着女だ。でも、いちいち如月くんの前に晒されるのは嫌だ。その恥ずかしさにはまったく慣れない。

新しい服に着替えて彼の前に立つたび、如月くんは「綺麗です」だの「似合ってます」だの、うっとりしたような顔でお世辞を言ってくれる。ただ、逆に心苦しい。だって、ピンクなんか全然似合ってたもの……

「どれもよかったですけど、真純さんは気に入ったものがありますか？」  
「……これいい」

今着ているのは、マリンブルーのノースリーブワンピース。

「そうですか？ ピンクも可愛かったですよ。足ももう少し出してもいいんですけどね」

——どこぞのファッションコーディネーターか!?

それにしてもピンクを薦めてくるとか、三流もいいところだ。

「これがいい。色が好きだから」

深みのある青や藍色が一番しっくりくる。剣道の、袴と同じ色だから。

結局自分の根底にはそれしかないのかとガツカリもするが、如月くんはやけに嬉しそうな顔で瞳を輝かせていた。

「ですよね。真純さんにはその色が一番似合うと思います。それに俺も、青が好きです」

青が好き。そういえば彼の車も同じ色だ。

そんなことを考えていたら、如月くんはおじさまに聞き捨てならないことを言った。

「それじゃ、今着ているもの一式いただきます。このまま着て行くのでなにか羽織るものも。それから試着したもので……ピンクも一式揃えて、お願いします」

「ちょ、ちよつと待つてよ!？」

今着ているものって、アクセサリーや靴も？ 小物も準備されたので身には着けたけど、私にだって予算というものがあるんだ。

さつきこつそりタグを確認したが、このドレスの値段だと明らかに私が設定していた予算をオーバーしている。

清水の舞台から飛び下りる思いでこの服は購入するが、ドレス以外の出費は控えなければ、明日からの食生活にも影響が出る。

「大丈夫ですよ。とてもよくお似合いです」

にこにこ顔のおじさまが迫ってくるが、ちつとも大丈夫なわけがない。

そりゃあ、あなたは商品が売れてほくほくでしょうけれど、私はカツカツなんですから！

「そうそう、今日は細かいことは気にしないで。ほら、結構時間がかかったから次に行きますよ?」

「次? 次つてなによ!? ちよつと如月くん!？」

あれよあれよという間に上着を着せられ、出入り口に向かわされる。支払いとか最初に着ていた服はどこへ行ったとか気になることはたくさんあるのに取り付く島もない。

如月くんは、おじさまに軽く挨拶をしてさつきと出て行くこうとしている。もう、このまま追いかけるしかないじゃない!?

「ねえ、荷物と支払いはどうするの!? どこでお会計するのか教えてよ!」

「だから、心配いりませんって。荷物はちゃんと受け取りましたから」

出口で受け取った老舗百貨店のロゴ入りの紙袋をひよいと持ち上げた如月くんは、来た道をまっすぐ戻って、またさつきのエレベーターへと乗り込んだ。

「ほら、今からならちょうどいい時間になりそうです。早く乗ってください!」

またも背中に手を添えられて、車の助手席へと誘導される。

履き慣れないヒールの高いパンプスは不安定で、軽く背中を押されただけなのに身体は自然と前に進んでしまう。なんだか釈然としなが、ここから外に出る道もわからないので、大人しく乗り込む。

車の乗り口に頭をぶつけないように前に屈んだら、横に立っていた如月くんも身体を倒し、私の右耳のすぐ傍にそつと顔を寄せた。

「……とても、似合っています。綺麗ですよ」

少し掠れた、低い声でささやかれる。その瞬間、私の心臓が大きく跳ねて、発火する勢いで顔が熱くなったのは言うまでもない。

——いきなりそんなこと言うなんて、反則でしょう!?

本当に今日の如月くんには、調子を狂わされる。

彼が素敵に見えるだなんて思ってしまったのは、秘密にしておこう。

地下駐車場から出ると、周囲はすっかり薄暗くなっていた。まあ、あれだけ何着も脱ぎ着していたのだから、時間がかかってしまっても不思議ではない。

「ねえ、どこに行くの?」

次はどこに連れて行かれるのかという不安はある。でも、運転する如月くんに迷いがなければ、不思議と落ち着いている自分もいる。驚きの連続に慣れてきた私は、次はどんなドッキリが待つ

者だろうか。

今日随分雰囲気違って戸惑っていたけれど、こういうところは私の知っている如月くんらしくて、少しだけ肩の力も抜けた。

「いいわよ。買い物に付き合ってもらったんだし、それくらいするわ」

「実は最初からそのつもりで、知り合いの店を予約しているんですよ」

如月くんに迷いが無いのは、今日のコースをすべて決め打ちしていたからだ。……抜け目がないというか、なんとというか。

車まで出してもらったことだし、ここは先輩としてご馳走するのが筋だろう。ただ、先ほどの例もあるでそれなりのお店かもしれない。……出費がかさむが、致し方ない。

車は繁華街を離れて、デートスポットとしても有名な湾岸エリアを走っている。この辺りは対岸の夜景が望めるレストランが多いとかで、特に若いカップルには人気があると、いつぞやのワイド

「ちようど食事時になるし、疲れてお腹も空いたんじゃないですか?」

「言われてみれば……」

午後から出かけるからと早めに昼食を食べたためか、いつの間にか空腹を感じていた。特に運動らしいことはしていないなくても、試着だって案外エネルギーを消費するものだ。

「俺も、昼食は軽めだったんで実は腹ぺこなんです。付き合ってもらえれば助かります」

腹ぺこは子供っぽい言い方である。落ち着いて見えていても、やっぱり中身は二十代前半の若者のようだ。

今日は随分雰囲気が違って戸惑っていたけれど、こういうところは私の知っている如月くんらしくて、少しだけ肩の力も抜けた。

「いいわよ。買い物に付き合ってもらったんだし、それくらいするわ」

「実は最初からそのつもりで、知り合いの店を予約しているんですよ」

如月くんに迷いが無いのは、今日のコースをすべて決め打ちしていたからだ。……抜け目がないというか、なんとというか。

車まで出してもらったことだし、ここは先輩としてご馳走するのが筋だろう。ただ、先ほどの例もあるでそれなりのお店かもしれない。……出費がかさむが、致し方ない。

車は繁華街を離れて、デートスポットとしても有名な湾岸エリアを走っている。この辺りは対岸の夜景が望めるレストランが多いとかで、特に若いカップルには人気があると、いつぞやのワイド

ショーの特集で取り上げられていた。

そういうデートスポットに対する憧れは人並みにある。夜景の見えるホテルの最上階の高級レストランに連れていかれて交際を申し込まれるというドラマチックな展開を夢見たりもするが、今の状況に浮き足立ったりはしない。

だって、彼は二十代前半の若い男で、私は今日で三十歳になるお局様<sup>おぼやけ</sup>なのだ。たまたま仕事上の付き合いができたためにこうして二人で過ごすことになったが、決して、デートではないとわきまえている。

——そういえば、今日は、誕生日だった……

自分の誕生日すら、すっかり忘れかけていた。

でも、今日はある意味で特別な日になったのかもしれない。

普段と違う体験をさせてもらって、こうやって若い男と海沿いをドライブする。それだけでも、十分贅沢<sup>ぜいたく</sup>な一日を過ごさせてもらった。

「……なんだか、楽しそうですね」

前を向いて運転しているはずの如月くんが、ふと口の端を上げる。

「そう、かしら？」

顔や口には出していないつもりなのに。あと、彼の目は横にもあるのか？

ただ、確かに私は楽しくなっていた。

「いつもよりずっと、表情が柔らかくていいと思います。俺も、いつもと違う真純さんが見れて嬉

しいです」

ごく自然に普段の私との違いや心境を言い当ててくる。……正統派王子、恐るべし。

「せっかくお洒落<sup>しゃれ</sup>したんだから、テーブルマナーの練習もしておきましょう」

目の前に見えてきたのは、結婚式場としても知られる有名な高級ホテル。まさか本当に、高層階の夜景を眺めるつもり——と思ったら、普通に通り過ぎた。

車が停まったのは、海を望む高台にある閑静<sup>かんせい</sup>な住宅街の一角の、隠れ家風レストランだった。

「つい最近知り合いが独立開業した店なんですよ。フレンチではあるんですけど、こぢんまりとした店なんで周囲を気にせずに食事ができるんです」

ここでも、年上のオーナーシェフ<sup>シェフ</sup>に快い出迎えを受けた。いったいどういう生活したらそんな知り合いができるものなのかと不思議だ。営業の接待はこういったところで行<sup>おこな</sup>われるのが主流、なのだろうか。

「ここって、その……お高いんじゃないの？」

さっきのドレスを買った上に、こんな素敵<sup>すてき</sup>なところで食事して……手持ちで足りるだろうか。不安がよぎり、ドキドキしてくる。

「仕入れ値を抑えているらしく、案外リーズナブルなんですよ。でもシェフの腕は確かです。さっきのホテルとかだったら、倍の金額は取られるかもしれないですね」

一日数組限定の会員制だという店は、ロールカーテンで仕切られたテーブルが数席と、大きな鉄板のあるカウンターだけのところだった。店の壁の半分はガラス張りで、窓の外には夜の海と対岸

の夜景がほのかに揺れる、絶好のロケーションが広がっている。そして今、店内には、私たち以外の客の姿はない。

料理は本格的なフレンチのコース料理。トリュフやフォアグラといったテレビでしかお目にかからない高級食材が出てきて、フォークとナイフを持つ手が震えた。そんな私を見ているのは如月くんだけで、些細な不作法があっても彼はそれをいちいち指摘したりもしない。それどころか、口当たりのよさそうなワインを選んでくれたり、食べるのが難しそうな凝った料理が出てきたときは食べ方をシェフに質問したりしてくれて、私は楽しく食事ができた。

間接照明とテーブルの上のキャンドルが作り出す幻想的な空間と、紳士的で気が利く後輩。普通の場所では悪目立ちしそうな私のドレス姿も、ここだと馴染んでいる。シックな内装の店内は居心地がよくて、時間を追うごとに緊張の糸はほぐれていった。

なにより店内で目を惹いたのは、店の奥に鎮座する大きなグランドピアノ。今は演奏されていないけれど、ピアノの音色はこの空間をさらに華やかにするだろう。

「ピアノに興味があるんですか？」

無意識に見つめていたらしく、如月くんに問いかけられてハッとした。

「昔、少しだけ習っていたのよ」

私だって、剣道以外の習い事をする機会があった。実はその頃は剣道よりもピアノのほうが好きで、そちらを熱心に練習していたのだ。けれど、父が他界して経済的に苦しくなってきたから、どちらか一本に絞らざるを得なかった。子供心に大いに迷ったが、少しでも父の名残のある剣道を選ん

で、泣く泣くピアノを諦めたという切ない思い出がある。

「よかったら、弾いてみますか？」

「無理よ。猫踏んじやった、くらいしか弾けないわ」

なにせ、バイエルの色が赤とか黄色とかいう時期に辞めてしまったから、とてもじゃないが人前で披露できるような腕前じゃない。

「だったら、もう一回習ってみるとかどうですか？」

「今さら？ 独身女が子供に交じってピアノ教室に通うなんて、笑い者もいいところよ」

世の中にはそういうバイタリテイ溢れる人種もいるだろうけれど、私には無理だ。なにより、そういうおしとやかな習い事が自分に似合わないことくらい、自分が一番わかっている。子供の頃にピアノを習っていたときも、父からはよく「真純には竹刀のほうが似合う」と言われていたものだ。「そうですか？ なにかを始めるのに、遅いなんてないと思いますけどね」

そう言っつて、如月くんはおもむろに席を立つと、グランドピアノの前に座った。

彼の指が、鍵盤を滑る。

流れてきた曲は——『Happy Birthday to You』

ジャズテイストにアレンジされたメロディに、しばし啞然とした。

如月くんがピアノを弾けるのに驚いたのもあるけれど、私の誕生日を知っていたことにさらに驚く。

短い曲の終わりとともに、テーブルには誕生日ケーキと花束が届けられた。



花束を受け取った如月くんが、それを私に差し出す。

「改めまして、お誕生日おめでとうございます。今日を真純さんと過ごせて光栄です」

可愛らしいピンクのバラが、多分、三十本……本数が多いことが恨めしい。

「……知ってたの？」

「もちろん。今日のはすべて、俺から真純さんへの誕生日祝いです」

席に座り直した如月くんの顔が、キャンドルに照らされてほんのりと赤らんで見える。

誕生日に洋服をプレゼントして、フレンチのディナーにピアノ、ケーキに花束だなんて——キザだ。

「……君って正真正銘の天然王子だったのね！」

私の一言に、如月くんはおるか、傍らで見守っていたシェフさえもガクツと肩を落としたのはなぜだろう。

「先輩の誕生日を調べておくなんて、やっぱり営業のエースはやるのが違うわ！ でも、これって個人情報でしょう？ 人事部が教えたのなら問題だわ」

いくら同じ会社の同僚であっても、人の生年月日はそう簡単に教えていいものではない。場合によっては悪事に利用することだってできるのだから、念のため休み明けには忠告しておこうかな。

「そうきますか……」

ガクツリとうなだれた如月くんは、テーブルに突っ伏してしまっている。

「生年月日は、人事部に聞いたわけじゃありませんから……」

「あら、じゃあうちの課の人間かしら？ それはそれで注意しておかなくちゃね」

「……教えてくれた人間の名前は伏せさせてください」

十中八九、後輩の女子社員の誰かだろう。でも、普段おじさんばかりを相手にしている彼女たちが如月くんに王子様スマイルで尋ねられたら、ひとたまりもなかったのではないかと想像がつく。彼が私の個人情報を悪事に利用することはないだろうし、見逃そう。

「結構な反則技を使ったんですけど、まさかそんな感想だとは思いませんでした」

「反則技って？ 確かに驚かされたわよ。如月くんのエスコートスキルの高さに。誕生日に貴重な経験をさせてもらったわ」

申し訳ないけれど、如月くんくらいの若い男は、カラオケやゲームセンターといった騒がしい場所で遊んでいるものとはかき思っていた。

「もしかして、俺がいつもこんなデートをしてると思ってます？」

「違うの？」

「も、いいです……なんかドツと疲れました。もう、俺も吞みますよ？」

「君が吞んだら運転はどうするの？ 私は無理よ」

「車を置かせてもらって、明日取りにきます！」

如月くんは、すぐ隣で苦笑いを浮かべていたシェフにワインの銘柄を伝える。そして運ばれてくると、勢いよく吞み始めてしまった。

どうして急にヤケになったような態度を取ったのかは不明だが、ちょっとだけ可愛いだなんて

思ってしまった。

「それじゃ、私も遠慮なくいただこうかしら」

豪快にグラスを呷る如月くんの姿に、私も自分のグラスを持ち上げた。

「乾杯」

お互いのグラスを軽くぶつけて、ついつい私もスイッチが入ってしまった。

それから、どれくらい呑んだだろう。テーブルの上には空になったボトルが何本か転がっているが、いちいち数えるのも億劫なくらい頭がふわふわする。

如月くんは営業のエースなだけあって話術にも長けていて、入社当初にやってしまった営業先での失敗談や先輩たちの武勇伝などを面白おかしく饒舌に語っている。それらはとても興味深く、相槌を打ちながらグラスに口をつけた。やがて私のグラスが空になると、すぐに彼はお代わりを用意してくれる。

お酒の力もあって、彼と過ごす時間が不思議と心地よいものになっていく。なにより、私を相手にしてもまったく萎縮することのない態度がいい。

子供の頃から、どこか抜けている母親に代わって、小さい弟や妹たちの面倒を見てきた。それに近所の同年代たちからも頼りにされることが多かった。就職した今も、設計部のお局様として君臨している。そんなことから、私に声をかけるときには誰しもがちょっと緊張した様子なのだ。それを不快に思うことはなくても、なんとなく皆との間に壁があるようで、実は気にしていた。

だから、如月くと些細なことでポンポンやり取りができるのは存外楽しい。彼の声すらも心地よくて、どんな気分がよくなっていく。

「真純さん、少し顔が赤いですけど大丈夫ですか？」

ゆらゆらと揺れる視界の先で、如月くんが怪訝そうな顔をしている。

「ん、大丈夫……」

心配されているのが嬉しくて、つい口元が綻ぶ。私を見ている如月くんが驚いた顔をしていたけれど、意味を考えるのは面倒臭い。

「もしかしなくても酔ってますよね？」

「私、酔っ払ってなんかないってば」

「酔っ払いは、みんなそう言うんですよ。確かにちよっとボトルを空けすぎたかな……今さらですがお酒は強いんですよね？」

これだけボトルを空にしておいて、本当に今さらな質問だ。

身体はまるで雲の上にいるように軽いけれど、彼の言っていることはちゃんとわかる。

「私、男の人と二人つきりで呑むのなんて初めて……」

自分の声はやけにくぐもって聞こえるし舌足らずな感じがするのは、きつとお酒による酩酊感のせいだろう。

こうやって男性と二人で出かけるのは初めてのことで、それだけでなくもいろいろと慣れない場所に行って緊張した。そのせいも、それがほぐれた今はすこぶる調子がいい。

「質問と答えが合っていないんですけど、まあいいや。男性と呑むのは初めてなんですかね？」

「呑むどころか、出かけるのも初めて……。今まで、誰とも付き合ったことないから」

思わず馬鹿正直にカミングアウトしてしまった。

色恋の類たぐいとは無縁だった私は、ガールズトークで恋バナなんて機会にも恵まれていなくて、ようやく秘密を打ち明けられて、身体どころか心までもが軽くなったような気がした。

如月くんの顔がさらに驚いた顔になったのがおかしくて、逆にもっと驚かせてやりたいという気持ちがあふつふつと湧わいてくる。

「誰とも、付き合ったことがないんですか？」

「そうだよお。だから、三十歳にしていまだにキスもしていないヤラみそ女です」

三十歳を超えてもセックス経験のない女性のことを、ヤラずに三十路みそじを迎えてしまった「ヤラみそ女」と呼ぶそうだ。

「私はこんな性格でしょう？ こんな可愛げのない女が、相手にされるわけないわよね……」

——自分に可愛げなんてないと気がついたのは、いつだろう。

手足が伸びて、他の人よりも大柄になったとき？

それとも、父が亡くなって、幼い弟たちや母のためにしつかりすると決めたとき？

子供の頃の私は、実は、可愛くてキラキラしたものが好きだった。当時の写真に写る私は、どれも女の子らしいピンクでふりふりな格好ばかりしていて、お姫様願望も人一倍強かった。いつか自分にも白馬に乗った王子様が……。なんて、淡い幻想に胸を弾ませていたりもした。

だけど、父が死んですべてが一変した。

私が男性に筋骨隆々とした肉体を求めるのにも、そのことが大いに関係している。

あんなにも強靱きょうじんな身体みの持ち主だった父は、病床びょうじょうでみるみるうちに衰弱すいじやくしていった。食事も満足にとれず、日に日に衰弱すいじやくしていく父を見るのは辛かった。私を軽々と持ち上げていた逞たくましい腕は骨と皮だけになり、最期さいごにはこれまでの半分ほどの大きさに見えた。そんな父の姿は、今も目に焼き付いている。

だから私は、男性に対して元気だった頃の父の面影おもかげを探してしまう。それに加えて平均よりも背が高く育ったため、私を抱え上げてくれるのは線が細い王子様ではなく、逆三角形の体型の持ち主だと気づいた。こうして私のお姫様願望は歪いびつに変化していったのである。

それでも、いつかは自分だけの王子様が現れるのではないかという密ひそかな期待を持ち続けていた。お姫様を見つけた王子様は、幼い頃に父がそうしてくれたように私を軽々と持ち上げて、そっと口づけして——なんて、そんな乙女チックな願望は、今では口に出すのもおこがましい。

なにしろ私は、お姫様とも、男性に好まれるような可愛らしい女性ともかけ離れている。

周囲から求められる自分になることに必死だった私は、お姫様ではなく王子様と呼ばれるようになった。

おまけに、これまでの人生で恋愛を疎おろそかにし過ぎていたと気づいたときには、もう、二十代もなかばに差し掛かっていた。

恋愛も結婚あひらもまだ諦あきらめたくはないけど、本当は心のどこかで気づいていた。仕事に没頭ぼつとうして、役

立ち読みサンプル  
はここまで

職をもらって、老後の蓄えを増やしているのは、一人で生きていくことを覚悟しているからに他ならない。

「真純さんは、魅力的だと思えますよ？」

「お世辞をどうもありがとうございます。でも魅力があつたら、とつくの昔に恋人ができてるんじゃないの？」

「それは、タイミングの問題です」

「タイミングかあ……じゃあ今になって三枝先輩と再会できたのも、運命のかなあ？」

大学を卒業して早八年。今になって憧れだった先輩に出会ったことには、もしかしたら意味があるのかもしれない。

だって先輩は、ようやく出会えた理想の相手。彼ならば、私を軽々と持ち上げることができそう。

そう思ったなら、沈みかけていた気持ちがあふたたび高揚した。

だけど、如月くんの顔が先輩の名前を聞いた途端に曇ったような気がして、またすぐに落ち込んでしまう。

「そうだよねえ、先輩だって、三十路の処女は面倒臭いよねえ……」

あれだけ素敵な人なのだから、これまでだって多くの女性と付き合ってきたに違いない。そんな人が今さら、私みたいな不良物件を相手にしてくれるわけ、なかった。

「そういうのを面倒臭がる男とは付き合わなくて正解です」

「そんなこと言ったって、如月くんだって面倒臭いに決まってる！」

モテる男に、私の苦勞がわかってたまるか！

ムキになって口を尖らせた私に目を丸くした如月くんだけど、すぐにふつと笑顔になる。

「俺は相手が真純さんなら、処女だろうがそうじゃなからうが気になりませんけどね」

その笑顔はあまりにも綺麗で——男の人なのに、色が漏れているような妖艶なものに感じられ、思わず見惚れてしまった。それと同時に身体の奥がドクンと大きく脈を打った。

それからしばらく他愛ない話題で盛り上がった後、如月くんはおもむろに話を切り上げた。

「——そろそろ出ましようか」

如月くんがシェフを呼んで話をしているのを、私はただぼんやりと見ていた。

如月くんに促されて席を立つと、ほんの少しだけ足がふらつく。すぐさま彼の手が支えるように腰に回されたけれど、気にもならなかった。

店の外にはタクシーがスタンバイしていて、私と如月くんは後部座席に並んで座った。

「まだ、呑み足りない」

「ダメです。これ以上は本当に呑み過ぎです」

「えー？ 帰りたくない」

「……それ、違う意味で勘違いしますよ？」

しかめっ面の如月くんがなにをどう勘違いしているのかわからない。いつもに比べて自分が陽気になっているのも、顔が火照っているのも自覚がある。だけど、意識はしっかりしているし醜態を晒しているつもりもなかった。